

織田信長の近江侵攻と甲賀郡中惣

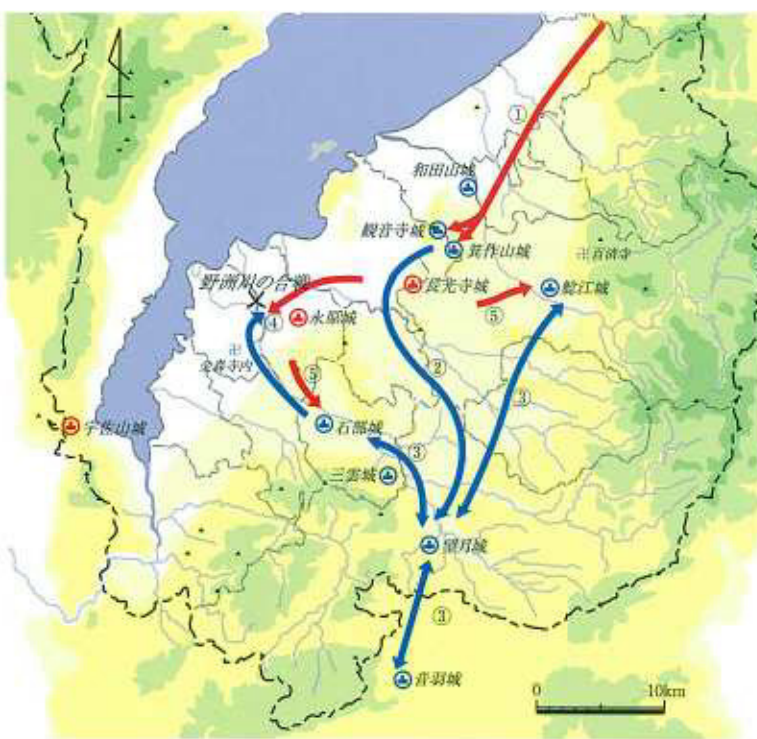
永禄十一（一五六八）年、織田信長は足利義昭を奉じ、上洛を開始して軍勢を近江に進めてきた。この時の六角氏には承禎・義治父子がいたが、折りしも六角氏の近江守護としての権力は、同六（一五六三）年の観音寺騒動により、斜陽の過程にあった。

当初六角氏は、観音寺城とその周辺の箕作山城・和田山城での籠城戦を企図していた。しかし、箕作山城が落城すると観音寺城を放棄し、甲賀郡に移った。このうち、六角氏は、石部城・鯉江城などで織田勢と戦い、局面によって拠点を移しながら、甲賀郡の山間地を本拠とした戦いに移行しようとした。この時六角氏を支援したのが三雲氏と望月氏である。

その後、永禄十二（元亀元）（一五六九）年にかけて、織田信長は各地の反信長勢力の反攻にあう。近江においても、六角承禎は湖南の一向一揆の勢力と呼応し、南近江の平野部に兵を進めた。しかし、元亀元年六月の野洲川の合戦において柴田・佐久間勢に敗れ、天正元（一五七三）年には石部城・鯉江城も陥落した。

織田・六角軍の動向
永禄11～天正元（1568～73）年のうごきを模式化したもの。

- ①永禄11（1568）年、織田信長の上洛開始。
- ②箕作山城が陥落し、六角氏は甲賀郡に本拠地を求めて、観音寺城を放棄。織田方の拠点として、長光寺城には柴田勝家、永原城には佐久間信盛が入る。
- ③永禄12（1569）年からは、六角氏は甲賀郡の山間地を本拠地に、時には伊賀にまで移動しながら、各地を転戦。石部城・鯉江城が主な戦いの場となる。
- ④元亀元（1570）年、浅井氏の反抗によって、織田方が一時劣勢になった局面を利用し、六角氏は湖南の平野部まで進出したが、6月の野洲川の合戦に敗れる。
- ⑤天正元（1573）年、石部城・鯉江城落城。



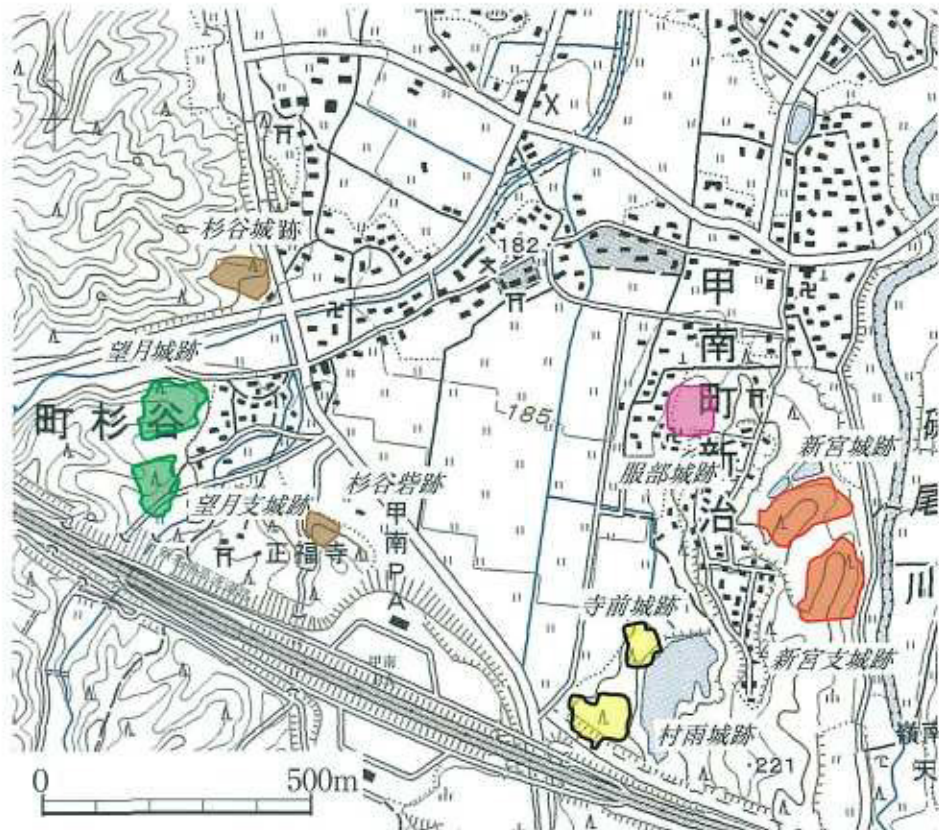
▲三雲城跡
三雲氏の本拠、湖南市吉永の背後の山上に位置する。城域には、六角氏段階に構築された石垣が随所に認められる。石垣を伴う枡形虎口は、織豊期以前の事例として注目される。

▼三雲城跡の枡形虎口の石垣



杉谷・新治地域の城と望月吉棟

観音寺城を落ちてきた六角承禎・義治父子を、甲賀郡で受け入れたのは、三雲氏と望月氏であった。望月氏は塩野（甲南町）に本拠を置き、同名中の勢力が塩野から杉谷・柑子までの広範囲にわたる。



▲甲南町杉谷・新治地区の城郭分布図

る、郡中惣の中でも有力な一族であった。六角氏の甲賀山間地内での拠点の一つが、甲南町の杉谷・新治の城館群であると考えられている。甲南町の杉谷・新治地区は、野洲川流域から杣川を上り、伊賀へ抜けるルート上に位置する。この地を抑えていたのが望月氏であり、永禄十一（一五六八）年以降の六角氏の後ろ盾には、三雲氏とともに望月吉棟という人物が大きな役割を果たしている。彼は六角氏父子をこの地で匿い、さらには伊賀国への退去先の調整まで行い、阿山の友田山内氏などが六角氏を受け入れたと伝えられる。



▲音羽氏城跡の石垣

伊賀市音羽にあり、音羽氏の城とされる。3方向を土塁囲みとした半郭方形の構造であるが、土塁内側や虎口周囲に石垣を多用する点が周辺の城にはない特徴である。六角氏は、観音寺城やその他の重要な城郭の縄張には石垣を多用する傾向がある。音羽氏城の石垣も、伊賀退去時の拠点として、六角氏が縄張に関与している可能性もある。

▲音羽氏城（藤岡英礼作図）



修が行われたと考えられている。伊賀においても「伊賀惣国一揆」と呼ばれる同名中の連合組織が存在し、その城も土塁をめぐらした半郭方形を縄張の基本構造としていたことはよく知られている。